

一九五〇年の殺人

海野十三

青空文庫

「旦那人殺しでがすよ」

「ナ二人殺しだつて？ 何処どこだツ、誰が殺されたのだツ、原稿の頁ページが無いのだ、早く云え」

「そツそんなに急いでも駄目です。場所は向うの橋の下ですよ。手足がバラバラになっていまさあ、いわゆるバラバラ事件というやつでナ」

「被害者の人相に見覚えは無いかネ」

「ああバラバラじゃ、人相は判りっこなしでさあ」

「じゃ直ぐに行つてみよう。さあ急げツ」

捜査課は総出で、現場へ急行した。なるほど橋の下に、
惨ざんぎや

虐^くの限りをつくして、バラバラの屍体^{したい}が散らばっている。

「殺されているのは、一体誰だろう？」

「それはレッド親分に極^{きま}っていますよ」

「アレツ。人相は判らぬと先刻^{さつき}云ったじゃないか」

「人相はモチ判りませんよ。しかしここに転がっている腕に『ケ
デー命』とあるからにや、レッド親分に間違いなしでサ」

「そんなの無いぞ、貴様！」と捜査課長は顔を膨^{ふく}らました。

「さあ、この屍体^{したい}はガランの中に拾い集めて、本庁の手術室へ送
つて呉れ。……あとは犯人探しだ。さあ方向探知器を持ってこい。

こうやって目盛^{めもり}を合^あわせて、鉦^{ボタン}を押せばいい。ウム、出たぞ出た
ぞ。テレビジョンに犯人が現れた。なアんだ。これあ同じ^{とせい}渡世^{とせい}の

競争相手のヤー口の奴じゃないか。オヤ真青まっさおになつて、四十番街を歩いているぞ。よよし、無線電話で交番を呼び出せ……ナニ出たつて。早く逮捕を依頼しろ。なんだつてもう捕えたというのかいヤー口の奴を。それじゃ一同、本庁へ引揚げだ。それ、呼子よびこの笛を吹くんだ、呼子の笛を……」

ピリピリピリと鳴る笛の音に集つた部下を引連れ、捜査課長はニコリともしないで凱旋がいせんの途とについた。

「課長！」と玄関の石段をのぼるが早いか、もうA組の主任警部が待つていた。

「犯人ヤー口が待ち疲れています。早くお調べが願いたいと云つて喧やかましくて仕方がありません」

「そうか、五月蠅うるさい奴やつじゃ。紅茶を一ぱい飲んでからのことだ」
紅茶に角砂糖を四つ抛ほうりこんだのを、さも美味おいしいそうに飲み終つてから課長は調べ室の方へトコトコ歩いていった。

「では調べを始めるでしょう。被害者の用意は、もういいナ」
「はい、出来ています。連れて参りましょうか」

「まだいいよ。加害者のヤーロが先だ。ここへ引立ててこい」
チエリーを一服喫ぶくすつているところへ、ヤーロ親分が留置場りゆうちじょうから連れられてきた。

「課長さん。早速さつそくですが自白じはくしますよ。レッドの奴をバラバラにしたなア、このあつしでサ。刑罰はどの位ですか」

「そんなことは、まだ云えない。それよりもお前は何故レッドを

殺害したのか」

「ナーニね。あいつの面がどうにも気に喰わねえんでサ。むしやくしやとして、やっちやいました。それだけのことです」

「よ才し。では次に被害者を呼べ。レッドを呼ぶのだ」

ヤーロはそれを聞くと椅子から立ち上った。警官は畏まつて、隣室から被害者レッドを連れてきた。

「やツ、ヤーロ奴め、ここにいたな」

「こらツ、静まれ、喧嘩をしちやいかん。ところでレッド、被害者として何か申立たいことはないか」

「へえ、ありがとうござえやす。あつしを殺したこのヤーロの奴を、ウンと罰してやっておくんさい。終り」

「それだけだナ。よし決まった。判決。ヤーロはレツドを殺害したる罪により、金五万円也の罰金に処す。但し二十日以内に納付すべし」

「えッ五万円を二十日間に……。そりやひどい。月賦げつぷにしておくんなさい。毎度のことじゃありませんか」

「駄目だ、毎度のことじゃから……。閉廷へいてい！」

捜査課長は、木の槌つちで卓たくの上をコツンと叩いた。加害者と被害者とは睨にらみ合つたまま、室へやを出ていった。

課長は手をのばして、葉巻を一本口へ抛ほうりこんだ。そして思わずひとりごと 白びやくした。

「外科が進歩するのも良よし悪あしだ。バラバラ屍体も二、三十分の

うちに、元のピンピンした身体に縫いあげられる世の中では、殺人罪が流行りすぎてイカン」

そのとき扉が開いて、警官が顔の色を変えて入って来た。

「課長、大変です。本庁の前で殺人です！」

「ホイ、また流行ったか」

「レツドがヤーロをバラバラにしてしまいました。先刻と反対で

す。レツドの身体を本庁で縫い合わせたとき、肩の肉が途中で落したものが無かったため、穴ぼこになっています。そうなったのもヤーロのせいだというので、ヤーロの肩の肉をナイフで切り、その序にバラバラにしてしまったのです」

「仕方がない。早く兩人を集めてこい。こんどは罰金をすこし高

くしよう」

それから二十一日経った。捜査課長はご機嫌甚だ斜めだ。さつき総監からイヤな言葉を抛なげつけられたのだ、「君のところには、取り立て未了みりようの罰金がすこぶる多くて責任額にも達しないじゃないか。あまり成績が悪いと気の毒だが、退職して貰おとわにやならぬぞ」と威おどされたのである。

（よオし、こうなったらば已やむを得えん。最後の手を用いて、総監の鼻を明してやろう……）

彼は机上のマイクロフォンを取りあげて、レッドとヤーロの逮捕でんめいを電命でんめいした。

二人の親分が本庁に到着したのは五分の後だった。

「二人揃ったネ。揃ったら、そのまま此の手術室へ入れッ」

「なにをするんです、課長さん」

「罰金は二、三日うちに届けますよオ」

「黙って入らんか。わしの命令だッ！」

レッドとヤーロが手術室の中に姿を消してから、約一時間の後、^{ドア}扉が明いて、一人の人間が出て来た。レッドのようでもあり、ヤーロのようでもあった。よく見ると縦^{たてはんぶん}半分^{ぶん}に切断した二人の身体を半分ずつ接^つぎ合わせてあった。右がレッドで、左がヤーロ。ちつとも足並が揃わず、二本の手は激しく^{つね}抓り合っている。

「さあ、こつちへ来い」と課長は意地悪い^え笑みを浮べて云った。

「当分この状態で暮してみろ。不便で参ったら、例の罰金を^{ちよう}調

達^{たつ}してこい。そうすれば元々どおり、レツドはレツド、ヤーロはヤーロの身体にしてやる。金が払えないうちは駄目だぞオ」

「課長、ひでえや。もう一人のあつし達はどうなるんで……」

「あれは人質にとつといて今日から下水掃除をさせる。辛けりや早く金を納^{おさ}めて引取りに來い」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行島」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

初出：「モダン日本」モダン日本社

1934（昭和9）年7月号

入力：tatsuki

校正：田中哲郎

2005年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

一九五〇年の殺人

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>